

1－7					
主題	在宅における経口摂取への取り組みとその成果				
副題	可能な限り尊厳のある生活の実現に挑戦し続けたいという家族の思い				
キーワード 1	経口摂取	キーワード 2	なし	研究(実践)期間	14 ヶ月

法人名・事業所名	(株) やさしい手 やさしい手三鷹居宅介護支援事業所
発表者(職種)	中川典子(介護支援専門員)
共同研究(実践)者	なし

電 話	0422-41-1832	F A X	0422-72-1430
-----	--------------	-------	--------------

事業所紹介	当事業所は、ケアマネジャーが 11 名在籍する三鷹市最大規模の居宅介護支援事業所です。ご利用者がその人らしい生活を継続できるように地域と協働して支援を行っております。在宅医を中心とした事例検討会や勉強会を毎月行っており、地域包括ケアに向けて多職種連携における情報共有の効率化や医療知識のスキルアップの取り組みを行っております。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

小脳出血の術後、胃ろう造設、経管栄養となり退院。寝たきり状態で発語もなく常時介護が必要な状態であった。小脳出血発症の数年前には脳梗塞を発症しており、その時に「リハビリをがんばって旅行に行きたい」と語っていたご利用者自身の意向も尊重し、ケアプランの長期目標は「夫婦で温泉旅行に行き、美味しいものを食べ・楽しむ」、短期目標は「健康状態の安定と安全に口から食べることができる」とした。目標を達成するために解決すべき課題は、①経口摂取が可能かどうかの嚥下評価、②安全に摂取できる姿勢保持ができるか、等嚥下障害による窒息・誤嚥性肺炎のリスク管理を行いながら、身体機能と口腔機能の向上を図ること目標とする。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

経管栄養や在宅生活に慣れ、全身状態が安定してきたところで、介護者の夫から「少しでも口からの摂取ができて、食べる楽しみを感じてほしい」と希望があり、「経口摂取」の取り組みを開始することとなった。多職種間で共通ルールの周知徹底、医療との密接な連携体制を整えることが必須であると考えられた。「口から食事を食べる」。その行為を行うための様々な取り組みが、ご利用者の認知機能へのアプローチとなり、生活の質の向上に繋がることに期待する。

利用者の情報

70代、女性、身長 160cm 体重 48.2kg BMI 18.8 歯あり 要介護度5 日常生活自立度:C2 認知症高齢者の日常生活自立度:M 既往歴:脳出血 脳梗塞 失語症 摂食嚥下障害 右片麻痺 左上下肢不随意運動 経管栄養:胃ろう部よりラコール半固形剤注入(3/日) コミュニケーション:発語なし 感情表出なし 日常生活全般全介助

《3. 具体的な取り組みの内容》

取り組みの手順：嚥下評価を行うため、口腔リハビリ専門歯科にて内視鏡検査実施。歯科医の指示に沿って、誤嚥リスクの少ない 1 から 2 c c を決められた食材、水分の粘度、決められた角度の姿勢で摂取訓練を開始する。在宅では、痰絡み時の吸引・排便コントロール・介護者への吸引指導拘縮予防・安全に経口摂取を行うための姿勢保持の機能訓練の実施。

- 1 活動の成果を出す大きなポイントとして、医師と歯科医を中心に、ケアチーム全体で目標の共有と情報共有を行い P D C A サイクルに沿った支援が行えたことが挙げられる。
- 2 取り組みに対するバックアップとして、医師会から医療介護専用 SNS を活用するための機材貸し出しがあり、医師を中心にチーム内で写真や情報等をリアルタイムで共有できた。

《4. 取り組みの結果》

取り組みを始めて 14 ヶ月が経過したが、口腔機能の向上で痰絡みや流涎が減り、経口摂取による誤嚥もなく、健康状態は安定している。栄養状態も良く、退院後より 4 k g 増加。認知機能については音や視界に入るものに対する反応や表情に変化が見られるようになり、座位保持や視線や頭部の位置の固定も一定時間可能となる。家族と過ごされている時には笑うこともあるという。夫婦揃っての活動参加や旅行も実現、目標はほぼ達成することができた。家族を中心にケアチームの信頼関係を深めることができた。

《5. 考察、まとめ》

今回の研究を通し、「食べ物を味わって食べる」ということが人間が生きるうえで必要不可欠なことを再確認した。可能な限りチャレンジしたいという家族の強い思いがケアチームを一つにまとめることができた。その後、旅行が実現したご利用者の家族から、公共施設や宿泊施設に障がい者・高齢者のための設備がなく大変苦労した話を聞いた。移動中に臥床したり、おむつ交換をしたりする場所がないということ、宿泊施設にも車椅子や高齢者に配慮した環境は整備されていないということ。

尊厳のある生活の実現には、環境整備へのアプローチも専門職として必須事項であると感じた。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご利用者とご家族(夫)に口頭にて説明し、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

多職種経口摂取支援チームマニュアル-経口維持加算に係る要介護高齢者の経口摂取支援に向けて-平成 27 年度版 発行：厚生労働科学研究費補助金(長寿科学総合研究事業)「要介護高齢者の経口摂取支援のための歯科と栄養の連携を推進するための研究」研究班 編集：枝広あや子(主任研究者)

「礎から学ぶ口腔ケア 第2版：口をまもる 生命をまもる」学研メディカル秀潤社 著者：菊谷 武

《8. 提案と発信》

その人らしく生活することの実現には、多職種によるチームケアが必須である。そのためには、共通言語及びツールの一本化、個人情報取り扱いについての垣根等、連携をスムーズにするために解決すべき課題は多岐にわたる。今回、医療介護専用 SNS と端末を活用してチームの情報共有を行ったが、会社の規約で SNS に参加できない事業所もあったため、ツールの一本化はできず、逆に手間になってしまったこともあった。